



# 親鸞聖人750回大遠忌



## 御影堂をお念仏の声で

山田行雄（やまだぎょうゆう）

(一)

平成の大修復の成った御影堂で、親鸞聖人の七百五十回大遠忌法要を勤修できることは、教団人にとって至極の喜びとするところでもあります。全国より門信徒が集い、大伽藍の中での大法要。だが、お念仏の声はいかがだろうか。ここに思いを馳せるとき、一抹の淋しさを感じるのは、私一人の危惧でありましょうか。

蓮如上人は、『蓮如上人御一代記聞書』に、

「憶念称名 いさみありて」とは、称名はいさみの念仏なり、信のうへはうれしくいさみて申す念仏なり。（『註釈版聖典』一二四九頁）

といわれております。この蓮如上人の文は、覚如上人の『報恩講私記』にある「憶念称名精 ありて」の解釈であります。よって蓮如上人が「称名はいさみの念仏なり」とか、「信のうへはうれしくいさみて申す念仏なり」いわれているのです。だから「いさみ」とは漢字では精進の精の文字を当てなくてはなりません。精進とは一生懸命にする行為です。すなはち善における努力的行為を意味する言葉でありましょう。

真宗における信心と称名の関係は、信前称後であり、往生の因は信心であります。だが信を離れた称名はなく、信心正因と称名報恩は一双の法門です。

信心さえ獲得すれば、称名は称えても称えなくても問題ではないと思う人が多くなりつつあります。これは、信心を観念的に把握しているのであって、自己の問題となっていないのです。信心が観念的把握であれば、当然称名も観念的にしか理解できないのです。観念の世界には理解はあっても「うれしさ」という喜びはありません。先の蓮如上人の文に「信のうへはうれしくいさみて申す念仏なり」とあります。

称名の観念化はさらには称えなくても心に憶っていればよいのではないかと、念仏の憶念化へと逆行するのであると思われます。

(二)

真宗教理史上における「念仏」の解釈は、まず曇鸞大師の『往生論註』に、

ただ阿弥陀仏を憶念するをいふ。(中略)ただ名号を称するもまたかくのごとし。(『註釈版聖典・七祖篇』九八頁)

と、「念仏」とは憶念であり、また称名であるとされています。道綽禪師は『安樂集』に『觀經』の所説を「觀仏三昧」(『註釈版聖典・七祖篇』一八八頁)を宗とするといひ、また「念仏三昧」(『註釈版聖典・七祖篇』一九一頁)を一切の三昧の中の王とするもあります。この觀仏三昧は憶念を指し、念仏三昧は称名を示しているのであり、曇鸞大師の念仏についての憶念と称名義を相承しているのです。

次の善導大師は、念仏とは称名であり憶念義を捨否されるのです。『散善義』に、

一心にもつばら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず念々に捨てざるは、これを

正定の業と名づく、かの仏の願に順ずるがゆゑなり。(『註釈版聖典・七祖篇』四六三頁)

とあります。法然聖人は、善導大師においては、念(憶念)と声(称名)とは同一である(『註釈版

聖典・七祖篇』一二一二頁)と教えられてあります。すなわち善導大師においては、念仏とは心で憶

うことでなく、どこまでも口に「南無阿弥陀仏」と称えることであると示されてあるのです。この念仏

思想(称名思想)を承けられたのが法然聖人であり、その法然聖人の称名念仏義を相承されたのが親

鸞聖人であったのでして、心に憶っているようなものは、念仏とはいわぬとされたのです。

『歎異抄』第二条には、はるばる関東から往生の一大事を問い聞かんとして上洛された門弟たちに、親鸞聖人は「ただ念仏」で答えられ、その念仏とは、

仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の

仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず

候ふか。(『註釈版聖典』八三三頁)

と、善導・法然・そして宗祖と一直線に続いてきたのは称名念仏、口称念仏にほかなりません。

(三)

念仏とは、口に称えるものであるとわかっていても、現代の真宗信者の中には、なおも念仏は自分が称えるものだと思っている人が多いのではないのでしょうか。念仏は自分が称え、自分の称功しょうこうであるとするのは、二十願の念仏者です。

二十願の念仏とは、自力念仏を指します。だが自力念仏という念仏があるのではないのです。念仏はどこまでも他力である。その他力の念仏をわが称えると持ちかえるのを自力念仏といっているに過ぎぬのです。

「口で称えなくとも心で思っていたらそれでよい」「まだまだ念仏称えるような年でない」「そのようなところで念仏を称えると他人ひとが笑う」等々は、みな念仏は自分が称えるものであると思っている人々であり、二十願ぎょうにんの行人であります。

親鸞聖人が一番きらわれたことは何であったのか、ここに思いを致すとき、『教行信証』化土巻に、

微塵劫みじんこうを超過すれども、仏願力ぶつがんりきに帰しき 叵がたく、大信海だいしんかいに入りかた 叵しょうさし。まことに傷嗟しょうさすべし、深く悲歎すべし。おほよそ大小聖人だいしょうしょうにん、一切善人いっけつぜんじん、本願ほんがんの嘉号かごうをもつておのれが善根ぜんこんとするがゆゑに、信を生ずることあたはず、仏智ぶつちを了さとらず。かの因いんを建立りょうちせることを了知りょうちすることあたはざるゆゑに、報土ほうどに入るはうどことなきなり。(『註釈版聖典』四一二頁)

とあります。これは念仏は自分が称えるのだと思っている二十願ぎょうじやの行者ぎょうじやについての親鸞聖人の悲歎です。念仏は自分が称えるものだと思っている人々に対し、「仏願力がたに帰しがた 叵がたく、大信海がたにはいりがた 叵がたし」とあります。この叵という字は可(許可の可) よろしいという字がひっくりかえった文字であって、絶対にだめであるといつてあるのです。そのような人々に対し「まことに傷嗟すべし」とある傷嗟の文字には左訓さくんが附してあります。「傷嗟ナゲキナゲク」とあります。『教行信証』の中、このような強い言葉はこれ以外にありません。

口では「親鸞聖人のみ教に信順し」といっていても、親鸞聖人を最も悲しませていた人々はいないのか、そのような人を親鸞聖人は最も深く悲歎せられています。

「信のうへはうれしくいさみて申す念仏」の行人になってこそ、親鸞聖人の大遠忌をお迎えする真宗信者のまづもつての姿勢ではありませんか。御影堂をお念仏の声で満たそうではありませんか。御開山聖人の大遠忌しょうえんのご勝縁あに遇つても、お念仏申されぬ人は、いったいいつどこだったら念仏申されるのでしょうか。お念仏が、よろこび精いさみて申される身になるよう、こころがけようではありませんか。

(勸学)